

地元住民から見た鴨川流域環境評価

An Environmental Evaluation of Kamo River Basin from the View Point of Riverside Residents

○ 萩原良巳・萩原清子・松島敏和・柴田翔

○ Yoshimi HAGIHARA, Kiyoko HAGIHARA, Toshikazu MATSUSHIMA, Sho SHIBATA

For the purpose of environmental management, we did a survey of riverside residents of Suemaru-cho near Kamo River in Kyoto City. Using factor analysis we extracted four factors which contain their feelings and perspective of Kamo River. Through the use of summary graphs of their opinions we evaluated the Kamo River environment particularly the ecological environment for example which aspects they liked or disliked so we could determine which environmental situation would be satisfactory for them.

1. はじめに

環境の構成要素がジオ(Geo; 物理)・エコ(Eco; 生態)・ソシオ(Socio; 社会)の3つに分類されると考える。本研究では、水辺のジオ・エコ・ソシオ環境(以下、GES環境)をソシオの側から眺める。水辺環境マネジメントを考えた場合の生活者参加の基本的概念として、メタレベルの参加を、(Concern; 関心を持つ, Care; 気遣う, Commitment; 考えを明らかにする), アクタレベルの参加を、(あそび, なりわい, まもり, まつり)と定義する。ここでメタは心的機能であり、環境を共有する地元住民にとっては責任意識と考えることができる。アクタはその環境に関わる人々の具体的な行動様式である。これらの参加を通して、生活者がシステムの構成員として環境マネジメントに能動的に関わる「生活者参加型環境マネジメント」のあり方について考えよう。そのためにまず、生活者参加のメタやアクタがどこに存在して、どのような関連構造を持つのかを分析し、マネジメントの動機付けになるためにはどのようなGES環境が生活者にとって望ましいのか明らかにする必要がある。

2. 研究方法と目的

京都市内を流れる鴨川流域を対象地域として、京都市中京区末丸町(丸太町橋南側右岸沿い)においてアンケート形式による社会調査を行う。その結果をもとに地元住民から見た鴨川流域環境評価を行う。本研究では社会調査の結果より、(1)地元

住民の感性による「鴨川像」を明らかにし、(2)地元住民の感性から見た鴨川のGES環境(特にエコ環境)を評価することによって何が鴨川流域環境にとって望ましいのかを明らかにすることを目的とする。

3. 分析と考察

上記(1)について、鴨川の印象を表したSD(Semantic Differential)感性データにより因子分析を行い、「鴨川像」を構成する因子として、「なじみ」、「おもしろさ」、「しっとり感」、「すっきり感」の4つの因子を抽出した。これらの因子は事前に望ましいと仮定した項目とほぼ一致しており、地元住民は概ね鴨川に対してよい印象を持っていることが分かった。居住形態の違いからみると、マンション住まいの人の感性による鴨川像はやや平均化されているのに対して、一戸建ての人は多様な鴨川像を持っていることが分かった。

上記(2)について、鴨川の植物に関しては、「嫌い」という意見が少なく、全体的に見て望ましいと評価している。鳥類に関しては、カラス、ハト、トビを望ましくない鳥と評価している。魚類に関しては、外来種の存在を望ましくないと評価している等の結果を得た。

4. 今後に向けて

今回得られた結果から、地元住民の感性による評価がどのように意見や行動に反映されているのか(感性と意見や行動の結びつき)を考察すると共に地元住民以外の生活者の調査を行う。